

## 「川崎病医療の現状と今後の問題点を考える」

### 巻 頭 言

京都府立医科大学大学院医学研究科  
小児循環器・腎臓学

濱 岡 建 城

川崎病は、1967年に川崎富作博士が乳幼児に好発する急性の全身性熱性疾患として報告したことに始まる。その本体は中小の血管炎であり、合併症として冠動脈炎をはじめとする全身の血管障害がみられる。これまで、過去3回ほどの全国的な大流行がみられたが、一貫してその発症者数は増加しており、最近の全国調査では年間1万2千人、総数でも約25万人を超えている。このデータから見てもわかる通り、小児の日常診療の中で代表的な熱性疾患として広く知られている。

もともとは、川崎病自体はone-hit, self-limitedな疾患であるが、臨床的に問題となるのは前述した心血管合併症であり、その後遺症は虚血心疾患の原因となることから急性期の血管障害の発現と進展をおさえるため、早期で積極的な治療が行われている。一方、川崎病の4割を超える患者（約11万人）がすでに成人期に入っており、川崎病既往の成人例で冠イベント発症の報告が確実に増加している。このことから、川

崎病の原因究明はもちろんのこと、川崎病の急性期治療、冠動脈病変の発現と進展機序の解明、そして冠イベント抑制対策、など早期の対応が求められている。特に、冠動脈病変発症のkey-pointである急性期の炎症抑制治療、また急性期以後の冠動脈病変の病態の解明は現在最もホットな注目点といえる。

今回、第一線で川崎病診療と研究に当たっておられる先生方に、「川崎病の基本を見直す」ことをベースにして、さらに最新の医療情報と今後の問題点という幅広い内容で執筆をお願いした。主なテーマは、「川崎病疫学調査よりわかってきたこと」、「川崎病医療の病因と発症機序をめぐる最近の研究」、「急性期治療の問題点—免疫グロブリン大量療法の不応例を中心に」、「川崎病の既往は若年成人期冠イベントの危険因子となるか?」である。いずれも川崎病の本体を考えるうえで、また、第一線の臨床で川崎病と向き合ううえで、興味深い内容となっている。ご一読頂きたい。